

---

# チバリヨウ

雨.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チバリヨウ

### 【ISBN】

N7742A

### 【作者名】

雨・

### 【あらすじ】

将来の夢。進路。迫り来る選択から、俺はただひたすら逃げていた。そんな彼のとある日の放課後。

歌う事が好きだ。

そういうと、男のくせに」と笑われる。ナルシスト？ なんて言わ  
れることもある。

俺の周りだけかな？

とにかくそういう時は笑つて「冗談だつて流すしかできないんだけ  
ど。

でも俺は小さい頃からずっと歌つてきた。親父がいい年してバン  
ドのボーカルなんてしているせいもあるかもしねりない。

物心ついたときには、歌つていた。

だから、将来は歌手になりたいんです。

そう言つたら、田の前のここはばどんな顔するんだひつな。

チバリヨウ

「所田！ 明日までにそれ、書いて来いよ  
「……はい。それじゃ失礼しましたあ～」

後ろ手に進路指導室のドアを閉める。重い重いドア。ドアが閉ま  
ると同時に、今まで詰まっていた胸のムカムカをため息にして吐き  
出した。

「……ふうつ

将来歌手になりたいです、なんて……言えるかつつーの。この世に歌が好きな奴がどれだけいることか。そしてその中から歌手になれるものがどれだけいることか。誰に言われるまでも無くわかっている。

歌手になんてなれるわけない。

親父だって。無理だってわかってるから、趣味でバンドを続けてるんだろう。

俺もあと20年もすればそつなだけって話。  
そり、そんだけの話……。

窓の外はもう、オレンジ色に染まっていた。  
やつぱりフケて帰つたほうが良かつたかな。  
とにかく苦痛でしかない『進路相談』という名の説教から解放されただけでも、まず良しとしよう。

最近の流行歌を口ずさみながら、早足で教室へと戻る。  
さつさと帰ろう。

最近、皆授業が終わるとすぐに帰つてしまつ。  
クラスのほとんどの奴らが予備校に通つてゐるのだ。『受験』に  
向けて。

右手の中でくしゃくしゃになつた白い用紙をゅくつと広げる。  
進路志望書。

隣の席の奴らの書き込んでいるのを覗き見ると、皆有名大学名を  
書き連ねていた。

俺も、そう書くべきなのかもしない。この進学校では、就職や  
専門学校を目指す奴なんて皆無なのだ。  
まして歌手になりたいなんていう奴など、『変人』扱いられるのが当然。

大学名でも書いておくか。適当に。そう思つてシャーペンを握り締めた。

だけど、書けなかつた。白紙のまま……提出した。本当はただ逃げただけつてのはわかつてゐる。この進学校から、叶わない夢から、情けない自分から。逃げてゐるだけだと。それでも俺は飽き足らず、『逃げてゐる』という現状からも逃げている。

このまま逃げ続けたところで、歌手になれるわけでもないのに。

「Jーんな世の中ーだーからつー..」

ガシャン！

誰もいないだろうと思つてゐた教室に、人がいた。

俺は、彼女を驚かせてしまつた……のか？ 恐らくそうだと思つ。思い切り歌いながらドアを開けたのと同時に、彼女の文房具が床に落ちたから。

だが彼女……確かに青葉さん、は微動だにせず俺をまつすぐ見つめている。その態度に驚きなんて微塵も見当たらない。

謝るべきかどうか悩んでいると、彼女が先に口を開いた。

「歌。すごい上手なんだね」

突然の彼女の言葉に頬が熱くなる。

俺は青葉さんから思いつきり田線をそらした。

歌、聞かれていたのか。そりやあんだけでかい声で歌えば……。でも何より、褒められた。

教室で、しかもクラスメイトに堂々と歌を褒められるのなんて初

めてだ。

それが嬉しいと同時に恥ずかしい。

「あ、ありがとう……青葉さん何してるの？」

進路志望書をポケットに突っ込んで、青葉さんの席に駆け寄る。そして落ちた文房具を拾つた。下を向いていれば赤い顔も悟られないだろう……なんてずるいこと考えながら。

それほどに彼女のカウンターパンチは見事に決まったのだ。拾つたペンケースを差し出す。

「ありがとう。私は……占つてるの」

彼女はペンケースを受け取りながらそう答えた。

確かに、彼女の机には四枚のカードがダイヤ型に並べられている。へえ、こうやって直に占つしてくるところなんて、初めて見るかもしれない。

カードをまじまじと見つめながら、何を占つてるの？ と聞こうとした時だった。

「所田くんのことをね」

「えっ？ それって……」

どういう意味？ 僕はその言葉を飲み込んだ。

青葉さんが、カードに手を伸ばしたからだ。

俺は隣の席の机によつかかって、その様子を見守る。

占いはあまり信じる方じやない。でもこうやって自分のことを占つているなんて言われたら、気になってしまつ。

俺のことねえ。これで将来歌手になります、なんて結果が出たら

どれだけ嬉しいだろ？。

青葉さんの顔は、長い黒髪に遮られ見て見ることができなかつた。

彼女の手が、一番上にあるカードをめくる。右手に集中していると、意外にも彼女の指がペンダ「だらけな」に気づく。

パタン。

「所田くんの今。進路指導室で説教」

ドキッとする。確かにその通りだ。

彼女は俺が呼び出されたことを知っているのか？ だが担任は、掃除の時間に俺にボソッと告げただけだ。進路指導室に来るよひにと。

担任曰く、他の者に知られないよう配慮したといつ事らしい。そういうところでも氣を使われてもな、とは思つたが口こぼしなかつた。

とにかく、彼女が知つてているとは思えないのだが。

彼女は俺の思惑に気づく様子も無く、一枚目に手をかけた。パタン。

「所田くんの悩み。進路

これもその通り、だ。

青葉さんが、俺が進路指導室に呼び出されたことを知つていると  
はやつぱり思えない。

段々と心拍数が上がつてくる。

まさか、とは思つ。まさか、こんな偶然だ。クラス中のやつら、いや日本中の高校三年生が今進路に悩んでいるに決まつてゐる。

そう言い聞かせても、心臓は暴れ続ける。

俺の意識は完全に、三枚目のカードに伸びる青葉さんの手に集中していた。

指がカードの端を掴む。  
パタン。

「所田くんの未来。……歌手、になりたい……」

絶句した。当たっている。ものの見事に。

俺はいつの間にか青葉さんの横に立ち尽くしていた。

彼女と話すのはこれが初めてだ。青葉さんはクラスでも大人しい方で、外見がかわいらしい分余計に何を考えているのかわからないタイプだ（と俺は勝手に思っている。）

なのに、どうして誰にも言つた事のない事今まで……。

ふと、彼女が俺のほうに顔を向けた。

黒目がちの瞳がしっかりと俺の目を捉えている。

「残りの一枚。これはカードからの助言。……めぐる？」

青葉さんの手が、最後の一枚に伸びた。ペンダコだらけの指が、カードの淵をなぞる。

カードからの助言。つまり俺が歌手になるには、あるいは進路を決めるにはどうすべきかアドバイスしてくれるってことだよな。彼女の右手の周りに金色の光が見える。……ただの夕焼けとは違う、神々しい色が。

手の汗をズボンでふき取る。大きく息を吸つて、吐いた。  
俺の未来。教えてくれ、カード。

「……頼む」

青葉さんは優しく微笑んで、最後の一枚をめくった。  
そこには女人人が描かれていた。しかし俺にはそのカードが何を意味するのか全くわからない。

彼女はカードに手を添えたまま黙り込んでいた。彼女の口から今にも不幸の宣告がなされそうな気がして、俺は身を固くした。

「カードのお言葉は」

「ククリと睡をのみこむ。異様に口の中が乾いている。

相変わらず青葉さんの表情は見えない。彼女の輪郭は夕日に赤く縁取られていた。

俺の、夢、未来。進路。

激しく震える心臓に片手をやり、押さえつける。落ち着け俺。たかが占いじゃねえか……！

青葉さんの右手がカードを持ち上げた。高々と、彼女の頭上までそれを掲げる。掲げられたカードが夕日で紅く染まつた。

すうっと息を吸う音が聞こえた。

来る！

「『ちばりょー』です！」

チバリヨウ……？

カードのお言葉とやらは、誰もいない教室に気持ちよく響いた。だが俺の頭の中には入つてこなかつた。

チバリヨウ。生まれてはじめて聞く言葉。日本語なのだろうか。それとも、神の言葉……なんて、まさか。

「……『チバリヨウ』って？ 何？」

カードをまっすぐ掲げたままの青葉さんに恐る恐る尋ねる。すると彼女はきょとんとした顔で俺を見た。

「知らないの？ ちばりょーってこつのは沖縄の方言で『頑張れ』って意味」

「それって沖縄の占いなの？ 青葉さんって沖縄出身？」

「……そんなわけないじゃない！ 所田くんって面白いねえ」

青葉さんは大きな声を上げて笑った。

俺、そんなに的外れな事言つただろつか。

でも彼女の笑う姿を見ていると肩の力が一気に抜けた。

まるでこのカードで将来が決まると思っていた自分が本当に間抜けに思える。

俺も笑つた。

「さて、そろそろ行かなくつちや」

青葉さんがまだ少し笑いながら、カードを片付け始めた。

「どこに？ 帰るの？」

「ううん」

彼女はカードや文房具を鞄にしまい、立ち上がりて言つた。

「進路指導室」

そう言つて意地悪な笑みを浮かべて、じゃあね、と走り去つていった。

少し短めのスカートを翻して、風のようにつつていいく彼女の後姿

を見送りながら、小さく呟いてみた。

「……チバリヨー」

頑張れ、か。

あの占いが本物だつたのか。正直よくわからない。  
けれど、カードの助言だけは信じてもいいかもしないな。

ポケットの中から丸くなつた進路志望書を取り出す。  
ぐつしゃぐしゃだなあ。

掌で何度も何度も綺麗に伸ばした後、丁寧に四角に折る。それを  
ポケットではなく鞄にしまって、俺も教室を後にした。

青葉さんが漫画家を志しているのを知る事になるのは、また後の  
話。

(後書き)

少しでも前向きな短編とこいつばかりで挑戦してみましたが、やはり  
難しいです……。

今後のために、『意見』『感想』などが御座いましたら是非お聞かせく  
ださい。

貴重なお時間、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7742a/>

---

チバリヨウ

2010年11月9日14時44分発行